

日本語教育における映画の一般的な教材価値と 社会参画を支援できる教材価値 —『男はつらいよ』を資料として—

General teaching material value of the movie and the teaching material value that can support social participation in Japanese-language education:

Based on the analysis of the Japanese movie 'Otoko wa Tsurai yo'

中山 英治

要旨

本稿は、早稲田大学日本語教育研究センターで開講されているオープン教育科目の一つである「日本語教育教材考：映画『男はつらいよ』の日本語と日本文化」に関する実践の報告である。本授業科目は、留学生と日本人学生の混在型クラス、授業カルテを使用した個の学び、教材価値論というテーマの3つの教育的文脈において展開された。教材論や映画を使った実践研究に関する先行研究の整理を踏まえて、本授業科目の主素材である映画『男はつらいよ』の教材価値を受講者の書いた授業カルテや担当者の配布した資料を分析して考察した。その結果、この映画の「言語的な教材価値」、「内容的（非言語的）な教材価値」、「外国人学生の社会参画を支援できる教材価値」を指摘した。教材研究に関して本稿が依拠する理論的背景が従来の教材論ではなく、「教材と学習者」、「教材と日本語教師」、「教材化のプロセス」を統合した教材価値論であることも述べた。

キーワード：教材価値論，混在型授業，文化のインデックス化，視読解，社会参画

1. はじめに：本実践の教育的文脈と本稿の動機

本稿は、早稲田大学日本語教育研究センター（以下「日本語センター」）で開講されている「日本語教育教材考：映画『男はつらいよ』の日本語と日本文化」という授業科目における実践の報告である。この授業科目は、全学対象のオープン教育科目¹⁾（開講箇所：日本語センター）に位置づけられているため、受講者は、日本語センター（別科専修課程）所属の外国人留学生だけではなく、他箇所所属の学部生や大学院生なども含まれている。言わば、外国人留学生と日本人学生の混在型授業クラス（中村・園田 2004，村松 2004）となっている。日本語センターで開講されているオープン教育科目の位置づけの一つには、様々な専門的分野を学んでいる学生に向けて日本語教育学を広く提供することが含まれているが、本授業科目も日本語教育に興味や関心のある学生が履修しているクラスである。

こうした授業科目の位置づけと受講者の顔ぶれを踏まえて、本授業科目の担当者である私は、次のような教育的文脈を考慮して、「日本語教育教材考：映画『男はつらいよ』の日本語と日本文化」といった授業科目をデザインした。

【本授業科目の教育的文脈】

- (1) 授業形態：日本人と外国人が混在して、異文化を背景にしながら共育できること
- (2) 授業方法：受講者に個の学びを実感してもらうため、全参加者が交流できること
- (3) 授業内容：日本語教育学の文脈で映画の教材価値を考えること

このうち (1) の授業形態というのは、「小さな多文化共生社会²⁾」の実現を意識した文脈である。広い意味では早稲田大学全体が教育の国際化を謳っていることにつながり、狭い意味では日本語センターで展開されている授業科目が同じ姿勢を共有してカリキュラムが組まれていることにつながる文脈と言える。もう少し具体的に言うと、日本語センターで開講されている通常の留学生を対象とした授業科目では、日本人ボランティアの学生が授業に参加したり、留学生間でも様々な国の留学生が参加したりしながら多文化共生の授業が展開されているということである。本授業科目でも、ある時には日本人と外国人という境界を意識できたり、ある時にはそうした境界を越えたりしながら教室という小さな単位で共生を経験し、共育していけることを目指したというわけである。(2) の授業方法というのは、「学習過程の可視化や個別化」を意識した文脈である。担当者が受講者の学びのプロセスを目に見える形で確認できたり、受講者自身にもそれが見えるように考慮したということである。そのための方法として本授業科目では、「授業カルテ」という報告書³⁾を毎時間授業後に提出させることにした。(3) の授業内容というのは、本授業科目で取り上げたテーマである。本授業科目はオープン教育科目の中でも日本語教育学の副専攻科目のコア科目⁴⁾として位置づけられていることもあり、日本語教育学における主要な内容を扱う必要性もあった。他のコア科目との関係を視野に入れながら、日本語教育学のテーマの中でも比較的实际の日本語教育の授業内容が理解しやすいようなテーマを提供したいという考えがあった。他のオープン教育科目には教材論の概要的な授業科目⁵⁾があったため、本授業科目では、視聴覚教材の一つである映画の教材価値を考えると限定付きで開講した。本授業科目の教育的な文脈について言えば、少なくとも担当者の意識の中では以上のような3点を踏まえていたと言える。

本授業科目「日本語教育教材考：映画『男はつらいよ』の日本語と日本文化」は、2011年度秋学期で4期目の開講授業となる。これまでの授業を展開してきた中で、資料となる受講者の授業カルテや授業の中で議論してきた教材価値についての考えが蓄積されてきたので、一度これをまとめてみようというのが本稿の動機の一つである。本稿をまとめるのに際して、参照した資料は、次の通りである。

【参照した資料】

- (1) 受講者が書いた授業カルテ
- (2) 受講者が作成した映画の評価シート
- (3) 受講者が発表した映画の教材価値プレゼンテーションの発表資料
- (4) 担当者が作成して配付した教材資料
- (5) 映画『男はつらいよ』の映画 (DVD) と教材用脚本スクリプト
- (6) 映画『男はつらいよ』に関連する諸資料

なお、受講者の作成した資料や授業カルテの使用許可については、毎学期の受講生に担当者の教材研究や授業改善のためだけに使用するという趣旨を説明して、その使用許可をもらっている。また、早稲田大学日本語センター内に設置されている研究調査倫理申請委員会からも研究調査実施に関する承認を得ている。

2. 日本語教育における視聴覚教材を中心とした教材論と映画を使用した実践研究の整理

ここでは、前節 1. の本授業科目の教育的文脈で述べた日本語教育における視聴覚教材を中心とした教材論の研究と映画を使用した実践研究について整理しておきたいと思う。

2.1 日本語教育における教材論と視聴覚教材研究

本授業科目でメインの参考文献に挙げていた岡崎（1989）の「1. 教材論の体系的把握」を見ると、「教育教材・教具論の骨格」として、「(1) 教材・教具概論の分野」と「(2) 具体的使用の分野（分析・使用・作成）」とに分けて整理されている。「留学生受け入れ 10 万人計画」が国策の一つであった当時の学習者の多様化を社会的な背景に持った中で「領域全体の体系的整理及び教材の体系的分析、使用、開発といったことが可能」とも指摘されている。当時の日本語教育の文脈を外したとしても、この体系性を踏まえた教材論の整理は、参考になる。河原崎・吉川・吉岡（1992）は、同様に多様化をキーワードとして「教授法の変遷と教材」がまとめられており、学習者・日本語教師・教授法の多様化に伴って教材の多様化を指摘している。二つの論考を見てわかるように、教材論は常に学習者と教師（教授法）との関係の中で論じられるべき問題であると言える。窪田（1989）にも「学習者・教授者・対象言語の 3 者を結ぶ緊張関係の中にある」ものとして位置づけられる通り、教材（論）は、これらの変数に即して論じられることが必要である。

本稿では、「教材論」という位置づけではなく、「教材価値論」という位置づけを考えている。これは、「教材と学習者」や「教材と教師」の関係性を含めた概念であり、「誰が学ぶ教材価値か」ということや「誰が分析する教材価値か」ということを踏まえた概念である。そして、「教材価値論」には、「教材化」という概念も包摂される。これは、「誰が誰のために教材価値を見出すか」といったことである。この「教材化」には大きく二つのプロセスがある。一つは「既存の教材を誰かのために加工したり、修正したりするプロセス」であり、もう一つは「既存の素材⁶⁾を誰かのために教材にするプロセス」である。

上のような教材価値論の概念を踏まえた上で、ここからは、特に視聴覚教材の研究を概観しておく。視聴覚教材の一般的な利用法や使用法については、例えば、石田（1988）や佐久間（1989）などに 80 年代後半の教材研究の文脈の中で詳しい研究が報告されている。90 年代前半の研究でも河原崎・吉川・吉岡（1992）の「視聴覚教材論」の節では、「視聴覚教材の利用や開発の現状」とともに「視聴覚教材の使用法」がまとめられており、第二部の「教材解題編」と合わせて当時の教材論研究の成果が網羅的に報告されている。こうした流れを受けて『日本語教育指導参考書 21 視聴覚教育の基礎』（1995）が発行された。日本語教育における視聴覚教育・教材論に関する理論と

表 1 教材価値論と教材化

教材価値論		
教材と学習者	教材化のプロセス	教材と日本語教師
誰が学ぶ教材価値か	誰が誰のために教材価値を見出すか	誰が分析する教材価値か
学習者の興味や関心を調査したり、学習者のニーズやレベルを確かめたりしながら教材の目的化をはかる側面	教材化①：教材の加工や修正する 教材化②：素材を教材にする 学習者と教師をつなぐプロセス	日本語教師の授業デザインに即して教材を分析したり、開発や作成を行ったりする側面

実践方法がある程度確立されたとみてよい。90年代後半から現在まで学習者の多様化は拡大の一途をたどり、それに伴って教材の多様化も進み、視聴覚教材の使用法や実践報告も積み重ねられてきている。

2.2 映画を使用した実践研究

本授業科目は、視聴覚教材の中でも映画という媒体を使った実践である。これまでの実践研究の中にも映画を取り上げた実践研究があった。ここではそれらの研究を整理していきたい。松岡・宮本(2003)は、地域の日本語教室の学習内容に関する現状と課題を踏まえて、大学や日本語学校で行われる体系的知識の習得を目指したシラバスやカリキュラムが基礎となる言語形式(文法や語彙など)を中心とした学習に疑問を投げかけて、地域生活上のコミュニケーションの観点から映像教材の調査を実施している。結果として外国出身者は、社交表現(あいさつなど)や機能表現(依頼・謝罪など)に関する場面に即した定型表現に注目するという事実を指摘している。この調査で取り上げた映像資料は、日本語教育用の『日本語教育映像教材初級編「日本語で大丈夫」(国立国語研究所監修)』であったが、言語の構造的な側面だけでなく社会言語能力や社会文化能力への示唆を示している点が本授業科目の教育的文脈とつながり参考となる。映画素材の日本文化に着目した実践には、桑本・宮本(2006)や大川(2006)などがあったが、これらは、日本事情の授業や日本文化を学習項目の射程に入れた実践であった。いずれも映画の教材価値を考える中の文化的な価値の側面を強調している。本授業科目の一般的な教材価値と重なる点で、映画を利用した実践の中でもオーソドックスな方法であると言える。本稿で言うところの教材価値論の観点から見れば、桑本・宮本(2006b)の報告のうち、「4.2 使用した映画作品のテーマによる分類」が日本語教育的な視点からさらに吟味され、かつ「5. おわりに」で述べている「多数の映画から抜き出して鑑賞し、比較検討するという方法」が続けられれば、映画の教材価値研究にとって非常に有意義な研究となるように思われる。

3. 「日本語教育教材考：映画『男はつらいよ』の日本語と日本文化」の授業概要

ここでは、本授業科目の概要について、受講者の詳細と映画の内容を踏まえて、授業のコンセプトとシラバスの2つの観点に分けて、整理しておきたいと思う。

3.1 受講者の詳細と映画『男はつらいよ』の説明

本授業科目は、「1. はじめに」で述べたように異文化間の交流を背景にした留学生と日本人学生の混在型クラスであった。具体的な受講者の詳細をまとめてみると、次のようになる。

登録者数というのは、本授業科目に興味や関心を持って、学期開始当時に授業登録をした学生の数である。受講者数というのは、本授業科目の登録を済ませた後、オリエンテーションに参加してその後も受講を続けた学生の数である。毎学期、登録者数より受講者数の方が少なくなるのであるが、外国人学生のうちで登録だけして初めから来なかった学生はいたが、オリエンテーションで授業の概要やコンセプトを聞いて受講をキャンセルした学生は、0人であった。受講した学生の中には、本授業科目の混在型クラスの利点を理解し、本授業科目のおもしろさを授業カルテに記載した学生もいた。これまでの受講者は、本授業科目の形態に対して理解をしながら受講したことがうか

中山英治／日本語教育における映画の一般的な教材価値と社会参画を支援できる教材価値

表2 本授業科目の受講者の詳細

開講年度	受講者属性	受講者数 登録者数	日本人数	外国人数 レベル	箇所・所属
2010 春学期 (金曜日1限)		受講者数 17 人 (100%)	8 人 (47%)	9 人 (53%) 中級～上級	別科, 文学, 教育, SILS, 聴講, 外部
		登録者数 22 人			
2010 秋学期 (金曜日1限)		受講者数 18 人 (100%)	11 人 (61%)	7 人 (39%) 中級～上級	別科, SILS, 文学, 教育, 法学, 社会, 先進理工
		登録者数 21 人			
2011 春学期 (木曜日1限)		受講者数 16 人 (100%)	12 人 (75%)	4 人 (25%) 中級～上級	別科, SILS, 教育, 法学, 文学, 人間科学, 外部
		登録者数 20 人			
2011 秋学期 (木曜日1限)		受講者数 9 人 (100%)	5 人 (56%)	4 人 (44%) 中級～上級	別科, 国際教養, 文学, 理工, 教育, 社会科学, 大学院 (人間科学)
		登録者数 10 人			

がえる。日本人学生と外国人学生の比率を見ると、2010 春学期と 2011 秋学期では、日本人学生と留学生の比率はほぼ半分であったが、2010 秋学期と 2011 春学期では、日本人学生の受講者数が多かった。本授業科目では、普段マイノリティの立場で日本社会と関わっている外国人学生を念頭に置いて「小さな多文化共生社会」をデザインしているので、この比率はちょうどよい結果であった。授業に参加する日本人学生と外国人学生の混在比率をコントロールすることは一般的に難しいが、混在型クラスの理念やその履修方法の可能性を今後も考慮することは必要であるかもしれない。

本授業科目で取り上げた映画作品は、『男はつらいよ』（松竹株式会社製作）であった。「男はつらいよ 松竹公式サイト」(<http://www.tora-san.jp/index.html>)によれば、「松竹映画『男はつらいよ』シリーズは、山田洋次原作・脚本・監督（一部作品除く）・渥美清主演で 1969 年に第 1 作が公開され、以後 1995 年までの 26 年間に全 48 作品が公開された国民的人気シリーズ」とあり、日本映画の中でも傑作の一つと断言していいだろう。近いところでは同ホームページ上に 2008 年から 2009 年の間に映画の 40 周年を記念した各イベント・プロジェクトが企画・実施されたとあり、国内や海外での記念イベントや上映会が広く催されたと報告がある。現在もラジオ局文化放送の開局 60 周年特別企画として「みんなの寅さん」というラジオ番組も放送中（毎週月～金 8:13 - 8:20）である。様々な社会的背景の中で映画『男はつらいよ』は、映画としての魅力を見せ続けているのである。

映画『男はつらいよ』の内容は、同ホームページ上にある「『男はつらいよ』とは? : ストーリー」から引用して説明すると、「渥美清演じる主人公“フーテンの寅”こと車寅次郎が（中略）腹違いの妹さくら、おいちゃん、おばちゃんらが集まるだんご屋を中心とした柴又と、寅次郎が訪れる日本各地を舞台に、そこで出会った“マドンナ”と恋愛模様を繰り広げながら、なにかと騒動を起こす人情喜劇」であるという。毎回のドタバタ騒動の中で、旅・恋愛・家族・人生など様々なトピックが盛り込まれており、これほど多彩な内容も映画では珍しい。本授業科目でこの映画を取り上げた理由の一つは、この喜劇的要素と多彩なテーマ性であった。本授業科目の主旨は、日本語教育学という文脈の中で展開しようとする教材価値論の授業であったが、現代の学生たちがあまり視聴したことのない作品で、さらに学生たちの興味や関心を引く作品をと考えた結果、この『男はつらいよ』が候補に挙がったわけである。

3.2 授業コンセプト

本授業科目の授業コンセプトには大きく分けて3つのコンセプトがあった。それは、「1. はじめに」で述べた教育的文脈に並行する次の3つの授業コンセプトである。

【授業コンセプト】

- (1) 留学生の日本語能力や日本人学生の専門的知識を見て受講を限定しない
- (2) 全参加者が交流できるような提出物へのきめ細かいコメント付け及びその共有
- (3) 映画を作品として視聴することはしない。視聴する際は必ず教材化して視聴する

このうち(1)というのは、次のようなことである。様々な異文化的背景を持つ学生たちが交流できる混在型クラスをデザインしたいので、留学生の日本語レベルで受講を限定せず、何とか担当者の話す日本語に着いていけるだけの日本語能力があれば受講を認めることにした。これまで留学生の受講者は、中級から上級の日本語レベルが揃っていたが、学生個人個人の日本語レベルはまちまちであった。常に電子辞書を片手に持ちながら、授業を聞く学生もいれば、授業中にたどたどしい非規範的な日本語で質問をぶつけてくる学生もいた。本授業科目においては、こうした日本語能力の差を評価に反映することはしなかった。そうではなく、本授業科目の中では日本語の出来不出来をそのまま受け入れたり、学生同士で日本語能力の差を埋めていく関係性づくりを重視した。例えば、本授業科目の実践の中では「留学生の人たちに日本語の説明をするのって難しい。(11秋)」「普段あまり意識していないことを聞かれると対応できないこともあることがわかった。(11秋)」などといった意見を聞くこともあった。本授業科目が提供しようとした「小さな多文化共生社会」における言語接触の問題は、担当者の話し方や説明に依存するばかりでフォローされるのではなく、学生同士の協働の中で乗り越えられるべきだというのが本授業科目の授業コンセプトとして特に重視したことである。また、こうした授業コンセプトの裏には、学習という機会を教室に限定せず、学生の様々な生活場面においても同様の状況が生まれているだろうという想定があった。教室中心主義を脱却する方法の一つとしてもこの授業コンセプトは重要であった。(2)の授業コンセプト実現には前に述べた授業カルテの存在が大きい。この授業カルテには、学生の氏名や所属などの個人的な情報を書く欄以外に受講者の授業での学びや気づき、担当者からのコメントなどを書く欄があり、担当者は、色ペンを使ってすべての授業カルテにコメントを書き入れていく。テーマによっては、その授業カルテをまとめてクラスで共有できる資料を別途作成したりしている。また、ネットポータルや担当者の個人メール宛に質問ができる体制も整えているので、参加者全員による多方面からのインタラクションが可能となっている。すべてのテーマに関して授業カルテの課題を出すので、欠席した学生がいた場合でもネットポータル上のお知らせ配信を利用して授業内容と授業カルテの課題も必ず伝え、後日になっても授業カルテを提出するように求めている。もちろん、授業カルテは大きな評価の対象にしている。(3)の授業コンセプトというのは、(1)の授業コンセプトとも絡むが、次のようなことである。本授業科目では映画を視聴する際、外国人学生に対してその映画の語彙や文法的な知識を前提とした理解を求めないということである。極端に言えば、視聴した映画の場面理解が「自立的に」できなくても、「担当者の補足」や「学生同士の協働」で理解できればよいという態度である。本授業科目の学期開始のオリエンテーションでは、必ず外国人学生から日本語能力に関する心配の声が出る。映画の日本語が聞き取れなかったり、わからない言葉が出てきたりした時の不安である。そのとき必ず説明するのは、「自らの日本語に自信がなくても担当者やクラスメートと日本語でコミュニケーションすること」や「授業中にわからなかったこ

中山英治 / 日本語教育における映画の一般的な教材価値と社会参画を支援できる教材価値

とを自学すること」である。そうすることで映画の理解を求めるのではなく、日本語学習への態度を育成したり、外国語（本授業科目では日本語）の映画を見る契機を与えたりすることを盛り込んでいるのである。このことは担当者が考慮している「裏のシラバス」であるとも言える。これに対して、「表のシラバス」は、講義概要にも記されている教材価値論の学習である。本授業科目の第一義的な学習目標は、あくまでも映画作品の教材価値を見つけることであるから、今述べてきた各授業コンセプトを持ちながら、表面上は映画の中の教材価値を見出すタスクを行なっていくことになる。

3.3 授業シラバス

上に述べた授業コンセプトを背景にして本授業科目では、次のようなシラバスが定められている。日本語センターの講義概要（シラバス）を参考に表にまとめておく。

表3 本授業科目の簡易版シラバス（開講年度 2010 年度～ 2011 年度）

科目名	日本語教育教材考（映画『男はつらいよ』の日本語と日本文化）
学期・曜日・時限	2010 年度春・秋：金曜日 1 限 / 2011 年度春・秋：木曜日 1 限
授業概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. この授業では、映画を日本語教育の教材として使うことを考えます。 2. 映画『男はつらいよ』の中で使われている日本語を取り出して分析します。 3. 映画『男はつらいよ』の中の日本的なもの（文化・慣習）を分析します。 4. 映画に関して議論したり、教材価値発表会を行います。 5. 毎回の授業で検討したことや新たに考えてもらいたいことを授業カルテという報告書に書いてもらって毎週提出します。
授業の到達目標	授業づくりのアイデアを創出できたり、教材化の能力を身につけたりできます。
授業計画	<p>[第 1 回] 本講座の趣旨と概要説明</p> <p>[第 2 回] 映画『男はつらいよ』とはどんな映画なのか 1（人物とストーリー）</p> <p>[第 3 回] 映画『男はつらいよ』とはどんな映画なのか 2（旅と恋愛と家族）</p> <p>[第 4 回] シリーズの中で使いにくい作品と使いやすい作品と使いたい作品</p> <p>[第 5 回] 車寅次郎（主人公）の話す・書く日本語分析（仕事・挨拶・葉書の言葉）</p> <p>[第 6 回] 映画『男はつらいよ』は、どんな日本語教育の教材と組み合わせられるか</p> <p>[第 7 回] 映画『男はつらいよ』の中の語彙・文法を調べて、指導法を考えてみる</p> <p>[第 8 回] 映画『男はつらいよ』の中の日本文化や日本的なものを探してみる</p> <p>[第 9 回] 映画『男はつらいよ』を通して外国人の日本社会への社会参画を支援する①</p> <p>[第 10 回] 映画『男はつらいよ』を通して外国人の日本社会への社会参画を支援する②</p> <p>[第 11 回] 好きな場面を取り上げて、自分の考えた教材価値を発表する①</p> <p>[第 12 回] 好きな場面を取り上げて、自分の考えた教材価値を発表する②</p> <p>[第 13 回] これまでの教材価値発表会のまとめと教材価値シートの分析報告</p> <p>[第 14 回] レポート提出：映画『男はつらいよ』は日本語教育の教材になるか？</p> <p>[第 15 回] レポートのフィード・バック、本講座の振り返りなど</p>
教科書	講座担当者が作成したプリント教材が中心
参考文献	<p>岡崎敏雄著『日本語教育の教材 分析・使用・作成』（アルクオンデマンド BOOKS）</p> <p>『男はつらいよ パーフェクト・ガイド 寅次郎全部見せます』（教養文化シリーズ NHK 出版）</p> <p>吉村英夫著『完全版「男はつらいよ」の世界』（集英社文庫）</p> <p>※その他、授業で適宜紹介する</p>
評価	レポート 30% / 平常点（授業カルテなど）30% / その他（出席）40%
備考	参加者全員で作る授業、日本語に自信がない人も受講可能など

※授業計画は、年度によって多少の異なりがある。

4. 映画の一般的な教材価値：日本語が素材の教材価値（表のシラバス）

ここでは、前節3. で述べた授業計画のうち、日本語が素材となる教材価値を中心に具体的な考察を進めたいと思う。資料としては、学生の授業カルテと担当者が作成した配付教材が中心となる。映画『男はつらいよ』の SCRIPT も参照する。

4.1 音声・音韻の側面

本授業科目では授業計画の中に「車寅次郎（主人公）の話す・書く日本語分析」という回があり、取り上げる話の中心は、話し言葉の問題を扱った。話し言葉を中心としたセリフは、映画の理解には欠かせない。映画『男はつらいよ』を日本語教育の現場で使用する場合、やはりその聞き取り指導への利用は、一つの教材価値となるだろう。しかし、大変興味深いことに受講者の書いた授業カルテでは、毎学期とも必ず出てくるコメントとして「映画『男はつらいよ』は上級の学習者に見せて授業を行うべきです。」といった意見が出る。以下は授業カルテに書かれたコメントである。（カッコ内は年度と学期を表している。）

- 1) この映画を理解するには相当高いレベルの日本語力がないと難しいだろう（10 春）
- 2) 多人数の、俗語による早口な会話は初級者には難しいもののように思った。（11 春）
- 3) 日本語のスピードはちょっと速いから、初級中級（の下のレベル）の学生には無理なところがあるように思われます。（10 秋）

1) と 2) のコメントは日本人学生から出たコメントで、3) のコメントは外国人学生から出たコメントである。両者ともこの映画の早いセリフ回しから見て、高度な日本語能力が求められるという意見を披露している。本授業科目ではこのコメントに対して、「映画の理解を求める教材化」と「映画の理解を求めない教材化」の区別を示している。映画の理解を求める場合は確かにそれ相応の日本語能力が必要になることが多いが、何も映画を使うからといって、常にその映画のストーリーを理解することが前提になる授業デザインばかり考える必要もない。音声や音韻に着目する教材化の例として、本授業科目では寅さんの商売シーンを取り上げて、口上としてよく登場する「ものの始まりが一ならば、国の始まりが大和の国……」や「ヤケのヤンパチ日焼けのなすび……」などを聞かせて、数字だけを聞き取らせたり、知っている語彙を取り出させたりしている。そして、そこから派生して「口上とは何か」、「日本語におけるリズム」などを対象化していくわけである。この映画を見始めた頃は、何だか訳が分からずに聞いていた学生も何度も聞くうちに聞き覚えてしまったり、その面白さに気がつくようである。

ある程度の日本語能力が前提で指摘したコメントの中には、次のように音声的な側面から言語的な予測能力を指摘する外国人学生もいた。

- 4) 日本語能力がある程度高い人でないと、作品を楽しみながら勉強できるどころか、かなり苦労するでしょうね。そして使い方ですが、まずは聴解力と推測力が高められると思います。（10 春）

また、ある日本人学生は、寅さんの人となりを音声・音韻的な面から次のように指摘している。a が映画のセリフで、b が学生のコメントである。

- 5) a 寅：駅前のキッチャテンよ。うん？ 何してるって、一人でコーシー飲んで考えごとしてるのよ。（『男はつらいよ』第 16 作）

中山英治／日本語教育における映画の一般的な教材価値と社会参画を支援できる教材価値

- 5) b 「きっちゃてん」, 「コーシー」など寅さんは必ずしも今の日本における一般的な日本語で話しているわけではない。(10 春)

日本語の規範性やその規範性からの逸脱から主人公のキャラクターを考えるとという側面は、この映画を教材にする上で一つの教材価値を提供できる点であると言える。寅さんに限らず、他の登場人物の話し言葉に関して同様の指摘をした日本人学生もいた。

- 6) 舞台は下町ですが、登場人物はいろいろなタイプの日本語を話していました。さくら夫妻の言葉が一番教科書に近く、その他、車家の人々は下町の言葉、和尚さんや御前様は僧侶として、米倉齊加年は警官としての言葉、樫山文枝は山の手言葉、そしてこの作品では、桜田淳子が山形訛りを話していました。(10 春)

類似する教材価値としては、寅さんにとって難解なカタカナ語を間違っ使用したり、聞き返したりする場面にも見られる。こうした部分は、寅さんの無教養さを示すものである。

- 7) 志津：ええ。日記に、自殺とは人間だけがとりうる最も英雄的な行為である、なんて書いてあるんです。

寅：ハハア、そりゃ完全なイロノーゼですよ。尻ツベタの青いインテリがとかくかかりがちなイロノーゼって奴ですね。

寅：つまり、色気ってものが頭にのぼってくるんでそれでイロノーゼです。これは、すぐなおるんじゃないですか。

志津：なおるのでしょうか。(『男はつらいよ』第3作)

- 8) 富永：そもそもインダストリアル・レボリューションという用語は……

寅：はい。その、それだよ、インドの通りゃんせっての。それ、わかんない。

富永：君、君は産業革命を知らないんですか。(『男はつらいよ』第40作)

音韻的な情報と語彙的な情報が交錯する部分であるが、映画『男はつらいよ』が持つ喜劇性が言語的な要素と結びつきながら、教材価値として現れてくる部分であると言える。

本授業科目の受講を通して、学生たちがよく指摘するコメントに「会話のスタイル」や「カジュアルな口語体」などもある。教科書教材の副教材として映画『男はつらいよ』は、会話の実践的な教材価値を持つことを指摘する学生が多かった。具体的には「～しちゃう／しちゃった」のような縮約形、言いさし、省略などである。

4.2 語彙・文法の側面

映画『男はつらいよ』の語彙的な側面から教材価値を取り上げた回では、大きく分けて2つの教材価値を取り上げた。一つは「呼称表現」で、もう一つは「類義語・反対語」である。このうち前者の呼称表現とは、中山(2009)で取り上げたとらやの家族が寅さんをどのように呼び分けているかといったことや、その他に次のようなものもそれに含まれる。

- 9) 竜造：バカ、お前のおやじだ。

寅：おやじ? ……

さくら：そうよ、今日はね、お父ちゃんの二十七回忌よ。

寅：フン、なんでえ、ハハハ……おやじの法事かア、チェツ下らねえなあ。

竜造：何が下らねえんだ。実の父親の法事も知らねえで、どこをほっつき歩いてたんだ、本当に。

つね：そうだよ、たった一人きりの息子だっていうのに。(『男はつらいよ』第11作)

10) 【スタンダード証券・四階応接室】

健吉：車さんー車さん、お待たせしました。

寅：あー、なんだかすっかり寝ちゃったよ。今、仕事は上ったの？

(中略)

【上野の焼鳥屋・表、同・店内】

健吉：僕だってね、寅さんと同じ旅人だよ。はるばる出て来たんだからね。

ね、知ってる、枕崎。

寅：知ってる知ってる、枕崎。(『男はつらいよ』第34作)

9) は同一人物を別の呼称で呼び分ける例であり、10) は連続する場面の切り替わりと共に健吉が発した寅さんへの呼び方が切り替わった例である。10) ではフォーマルなオフィスの場面からインフォーマルな居酒屋の場面への切り替わりによって、あるいはそれに伴う健吉の打ち解けた心理によって、呼称の変化が見られる場面である。呼称表現に着目すれば、このように映画の場面性や登場人物の心理的な機微を追いかけることができて、ストーリーの理解につながる。これも語彙から見た教材価値の一つと言えるだろう。

場面を探せば、一連の談話の中で語彙の体系性に着目した指導が可能な場面がある。例えば次の例では、反対語が数多く使用されている場面であり語彙指導の取り出しが可能である。

11) 竜：そうだよお前、あの先生の頭ん中には難しい学問がいっぱいつまってるんだよ。

竜：色恋なんかするもんか、お前じゃあるまいし

寅：妙なこと言うねえ、それじゃなにかい、俺みたいな下等な人間だから恋をして、

寅：先生みたいな上等な人間は恋はしないと、おじちゃんはどう言うのか

竜：ああそうだよ

寅：じゃ、恋は下等な人間のするものか？

竜：決ってらア

(中略)

寅：ほう、誰もそういう気持ちを知らねえってのか、不幸せだねえ君たちは！

竜：寅ほど幸せじゃねえよ、みんな

社：そうだよ

寅：なんだい、それはどういう意味なんだよ？ え？ 幸せなのはおいちゃんだろう？

竜：俺は不幸せよ

寅：なに言ってやんで、倅せのかたまりみたいな面しやがって、不幸せぶるなって言うんだよ

竜：不幸せだから不幸せだって言うてるんだよ

寅：冗談じゃないっつうの！

博：幸せですよ。な、さくら

つ：そうよ、いつだって寅ちゃんは幸せだってみんなで言うてるのよ

(『男はつらいよ』第10作)

この場面では、反対語の指導が可能となっている場面であるが、「上・下」や「不」といった部分に着目させれば、意味的な側面だけではなく、語彙構成の面からも語彙力増加の契機を与えること

中山英治／日本語教育における映画の一般的な教材価値と社会参画を支援できる教材価値

ができる。

文法の側面では、特に「～んです。」といった文型を取り上げた回で、受講者たちの様々な気づきが見られて興味深かった。その一つは、普段、外国人学生が学習している文法・文型の学習について、日本人学生がその難易度をより深く理解した気づきであった。

- 12) 今日の「～んです」は、日本人である自分にとっても難しいものであった。日本語が学習者にとって習得するのに苦勞する言語であるということを実感することができた気がする。(10 秋)

こうした点も混在型クラスの効果と言えるだろう。「小さな多文化共生社会」を教室で展開することの意義は、共生の面から見た共生言語⁷⁾の育成につながる。ただし、映画の教材価値を考えると文脈で文法という側面を際立たせてみると、やはり次のように生教材の特徴から否定的な見解を示す学生も出ることに留意したい。

- 13) 特に寅さんの場合は、日本人が日常で使っている(いた)生の声であることが多い。そのため、文法にきれいに当てはまらない言葉(語順が変わっていたり)や省略の類が頻出し、初級学習者の副教材化としてはあまり適していないと思う。(中略)文法の指導と寅さん映画のような副教材は相性が悪い気がした。(10 春)

そこで、こうした映画の理解を前提に考えてしまう学生の観念的な理解に揺さぶりをかける方法が必要となり、本授業科目ではサイレント法⁸⁾という手法を紹介した。この方法は、聴覚教材の音を消して再生する手法である。寅さんが愛しのリリーのところへお見舞いに行く場面(『男はつらいよ』第25作)で、このサイレント法を使用して、「～はおいしい・まずいですか／～はまずいです、～はおいしいです」といった形容詞の叙述用法を指導する方法を展開したところ、学生からのコメントに次のようなものがあった。

- 14) サイレントで見たとき全くわかりませんでした。リリーの「まずい」しか口の動きでは読み取れなかったけど、こういうことを言っているんだらうなと想像したこともあながちはずれていませんでした。「前後や背景から生徒に想像させる」という方法は、非常に有効であると思います。(10 秋)

石田(1988)では、視聴覚教材(ビデオ教材)の特性として「①視覚と聴覚に訴える」や「②画面に動きがある」や「⑨音を消して画面だけでも使える」といったことを挙げている。ストーリーの理解にこだわらない指導を考えれば、生教材としての映画の教材価値を広く見出すことができるのである。その他にも学生たちは、文法的な側面の教材価値として映画『男はつらいよ』から「終助詞のバリエーション」やスピーチレベルシフトにも関わる「フォーマルとインフォーマルとの文法形式間の切り替え」などを指摘していた。

この節で述べたように、映画の一般的な教材価値としては、言語的な側面から音声・音韻の側面や語彙・文法の側面からの教材価値を見出すことができた。そこでは、映画を利用する際の2つの態度が確認された。それは、「理解を求める教材化」と「理解を求めない教材化」であった。これまでの映画の教材価値はどちらかと言えば「理解を求める教材化」を意識して使われていた面が強いが、これからは「理解を求めない教材化」についてももっと工夫することが必要である。そうすることで対象者を限定しない映画の教材価値が見つけ出せると思われる。

5. 映画の内容的（非言語的）な教材価値：文化や社会が素材の教材価値（表と裏のシラバス）

ここでは、前々節3. で述べた授業計画のうち、文化や社会が素材となる教材価値を中心に具体的な考察を進めたいと思う。資料としては、学生の授業カルテと担当者が配付した教材が中心となる。

5.1 「異文化間コミュニケーション」を素材にした教材価値

本授業科目では、映画『男はつらいよ』の日本文化や日本的なものを教材化する回として、「異文化間コミュニケーション」と「目に見えない文化・気づきにくい文化」という2つの視点を提供して教材価値を考えた。前者に関しては特に『男はつらいよ』の第25作「寅次郎春の夢」に特化して実施した。この第24作は、「フーテン的なアメリカ人セールスマンがとらやに下宿することになって大騒ぎの巻」（吉村 2005）とあるように寅さんが作品の中で外国人との接触を経験するという作品になっている。日本対アメリカという異文化間ギャップがテーマとなっている作品である。そこで本授業科目では、次のような映画のセリフを取り上げて、学生たちのステレオタイプに揺さぶりをかけることにした。この回のテーマは、非言語的な教材価値を考えさせるのと同時に、「小さな多文化共生社会」（裏のシラバス）の実践でもあった。

15) 圭子：いつもめぐみと話してるんですよ。口数が少なくて思いやりがあって、本当に魅力的だわねえって。

めぐみ：私、さくらさんが恋した気持、よく分るわ。

さくら：あら……

寅：へーえ、今時や、この手の男が流行るのかねえ。

博：流行りませんよ……まいったなあ。（『男はつらいよ』第24作）

16) 圭子：だから、アメリカ人によく誤解されましたわ。

竜：ほう、それはどうして？

圭子：ほら、アメリカ人は自分の考えをはっきり言うでしょう。

さくら：ええ。（『男はつらいよ』第24作）

例15) では、日本人の考える魅力的な男性像について、考えてもらい、そうしたイメージには文化が反映されているのかどうか、固定的な先入観が現れていないかどうかなどを議論した。また、例16) では、「アメリカ人は、自分の考えをはっきり言う」という言及に対して、その真偽を問い、「日本人は、〇〇」という言及を考えてもらって、それらを比較しながらステレオタイプの存在に気づかせるプロセスを踏んだ。こうした一連の活動については、古くは『21世紀の「日本事情」日本語教育～文化リテラシーへ』（第1～5号）やそれに継続する議論の場である論文誌『リテラシー』で広く展開されてきている日本事情教育の分野で議論されたテーマと深くかかわる。『男はつらいよ』の非言語的な教材価値を見出そうとするとき、これらの研究を背景にした日本事情の実践をデザインすることにもつながる可能性があったが、本授業科目では、教材価値論の主旨とずれるので、それを強調することはなかった。

本授業科目の中では、多くの「日本人は〇〇」や「～人は〇〇」が授業カルテに挙げられたが、どの学期にもこうしたステレオタイプの洗い出しと批判を重ねることができ、引いてはそこから

中山英治／日本語教育における映画の一般的な教材価値と社会参画を支援できる教材価値

『男はつらいよ』が非言語的な教材価値を持つことを認識することができていた。以下は、その具体的な例である。17) は外国人学生の例で、18) は日本人学生の例である。

- 17) やはり、人はそれぞれである。「〇〇国の人は、〇〇です。」とは言い切れない。私は△△の南の方に生まれたけれども、南の人が持っている「婉曲」は私が持っていない。(中略) 日本の文化を教育する際に、自分が見たことや感じたものなどを教えるのがいいけれども、「みんな同じではない。」と伝えるべきだと思う。(10 春)
- 18) 日本人は～、文化は～、というような一般化は、おおざっぱに文化を捉える際に多用しがちであるが、ある文化における母語話者と非母語話者との間を隔てかねない、議論の停滞に繋がる可能性を孕むものだと理解した。(中略) 寅さんを観ての感想であるが(中略) 寅さんは当初「アメリカ人」という存在を目の青い鼻の高い、気味の悪い存在として自ら壁を作った。マイケルを一個人としてでなく、一般化したアメリカ人という「外」として捉えたわけである。それを衝突という直接・個人的な交流を持って和解したことは興味深く、教材としての教材価値も高いと感じた。(11 秋)

また、言語形式を中心とした学習ではなく、コミュニケーションから捉えた学習目的を指摘する学生もいて、本授業科目が教育的な文脈と共に持っていた「対象者を限定しない」授業コンセプトに理解を示す言及もあった。

- 19) 日本語学習者が日常生活で、文法や単語の間違いをしてしまうことは避けられないことであるが、初級学習者にとっては小さなミスをしたとしても、コミュニケーションが可能であれば、そこまで大きな問題にはならないだろう。しかし、今回の場面のように、文化的な差異によって、その人の社会的あるいは第三者からの評価にマイナスの影響が及ぶとすれば、文法や単語の間違いよりも大きな問題があると言えるのではないか。そうであれば、日本語教授者は、初級・中級・上級という学習者のレベルに関わらず、日本文化をその学習者の母国文化との違いをしっかりと示していかなければならないだろう。その時、私たちは日本文化を押し付けたりしないように注意することも大切である。(10 春)

この学生の指摘は、細川(2002, 2003)が指摘するところの「個の文化」形成や「言語文化教育の意味」というところまでの意識には至っていないと思われるが、『男はつらいよ』という映画を視聴して実践した活動によって喚起された教材価値に関する言及であり、取り上げておきたいコメントである。

5.2 「目に見えない文化・気づきにくい文化」を素材にした教材価値

中山(2009)では、『男はつらいよ』の教材価値として「文化的素材としての価値」や「文化のインデックス化」(窪田2007)などを指摘したことがあった。そこでは、「目に見える文化」や「日本事情の教科書と並行する文化的な話題」を整理したのであるが、本授業科目では、これに対応して「目に見えない文化・気づきにくい文化」を取り上げた。この「目に見えない文化・気づきにくい文化」とは、例えば、『男はつらいよ』には頻繁に見え隠れする「義理人情」、「日本人の卑下意識」などである。また、映像としては見えているが、あまりにも当たり前背景化してしまっている「季節感の表現」などである。例を挙げると次のような指摘である。

- 20) 毎回、寅さんの謙遜する態度が見える。「俺なんか無理だよ」など謙遜する言葉がよく出ている。これら「目に見えない文化」や「気づきにくい習慣」は、すごくいい教材になると思

う。(10春)

この例は、外国人学生の例であるが、他にも同様の指摘を「私にはもったいない」等のセリフを引いてコメントした日本人学生もいた。映画に求める非言語的な教材価値としてこうした「目に見えない文化」や「気づきにくい文化」を取り上げる大きな理由の一つは、映画の視覚性にある。これは、言語教育における視覚表現の理解（ビューイング）や視読解といった概念を日本語教育の文脈で論じている門倉（2011）とも共通する部分である。外国人学生が経験している日常生活には、この視覚と聴覚の両方を複合的に駆使しながら把握すべき意味の世界が多い。それは教室の中であっても、教室を離れた生活であっても状況は同じである。本授業科目の中で行われる映画の教材化の意図は、一般的に聴解活動が中心になりやすい映画の使用法とは別に「見てわかること」を盛り込んだところにも向かっているのである。それは同時に聞いたり話したりする日本語のレベルに依存しないことも意味する。『男はつらいよ』は、英語や日本語の字幕が完備されている。また、日本語教育用に全48作品の台本データが電子化されている。（石上・坂谷内・小松 2001）外国人学生に対する日本語教育の面から見て言語のバリアフリー化がされており、そうした部分も教材価値が高いと言える。

6. 外国人（留学生や定住者）の社会参画を支援できる教材価値

これまで述べてきた『男はつらいよ』の教材価値は、言語的な教材価値と内容的（非言語的）な教材価値の2つの側面から指摘できる教材価値であったが、これから述べる教材価値は、映画そのものの教材価値というよりは、その周辺的な教材価値である。それは、映画のストーリーや内容から距離を置いて、現実世界にリンクする教材価値である。ここでは、大きく2つの観点から日本社会への参画を支援できる教材価値として述べたいと思う。一つは「柴又」という地域社会から始まる社会参入の観点であり、もう一つは「諸メディア」を通じた社会参画の観点である。

6.1 地域社会「柴又」から始まる社会参入から社会参画へ

映画『男はつらいよ』の中心的な舞台は、言わずと知れた「東京都葛飾区柴又」である。これについては、次の有名な寅さんのセリフでも確認できる。

21) 寅：私、生まれも育ちも葛飾柴又です。帝釈天で産湯をつかい、姓は車、名は寅次郎、人呼んでフーテンの寅と発します。（『男はつらいよ』第1作）

そして、柴又の下町の一角にある「とらや」というだんご屋を営んでいるおいちゃん、おばちゃん、妹のさくらや義弟の博とその息子である満男が家族として登場する。映画はこれらの下町を舞台とした地域社会を描きながら、寅さんとその家族の生活を表現している。『男はつらいよ』を日本語教育の教材として視聴した場合、例えば日本人学生も外国人学生もともにこれが日本の姿であるとか、代表的な日本人であるといった印象を持ちやすいし、日本社会の典型的な姿とも理解するようである。次の例は、どちらも学期開始すぐのコメントである。

22) この映画は、日本の家族・社会・また日本文化に触れおもしろい作品だと思いますが……

(10秋)

23) 教材として初級者にこの映画を見せると、彼らは「これが日本だ!! これが日本人の姿だ!!」というイメージを過分に持つことになるでしょう。(10秋)

中山英治／日本語教育における映画の一般的な教材価値と社会参画を支援できる教材価値

学生たちは『男はつらいよ』の映像の中に典型的な日本人や日本社会の姿を観る一方で、すぐに自分たちの現実的な社会との異なりにも気づく。それは外国人学生がドラマで知っていた日本と実際には異なる日本の風景を見て喚起させられたり（11 春）、言葉が古くて今の時代にふさわしくない、学んだとしても生活の中では使えない（11 春）などの見解からわかることであった。この学生たちの気づきの意味するところは、映画を契機として自分たちの生活や地域社会へ眼差しを向けさせることができるということである。そこに社会参入や社会参画の教材価値を見出すことができるのである。映画からすぐに自分たちの地域社会へリンクできない学生には、映画の舞台である「柴又」を現実の社会参入の対象として紹介してもよいだろう。本授業科目では、毎学期ではなかったが、学期後に受講者の中から希望者を引き連れて「柴又フィールド・トリップ」を開催した。これは、映画『男はつらいよ』で得た「柴又」の暮らしぶりやその社会に生きる人々を実際に経験することから日本社会への参入や参画の契機を観光という形で促したことになる。映画はあくまでも虚構の世界を描いているのであるが、『男はつらいよ』は、「柴又」という現実的な地域社会に根付いた映画になっている点で、他の映画作品よりこうした社会参入や社会参画のための教材価値が高くなっていると言える。

また、「柴又」という地域社会は、様々な環境から映画とリンクできる地域社会になっていることも忘れてはならない。例えば、映画を視聴した外国人学生が「柴又」という地域社会に興味を持った場合、どのような関わり方が可能であろうか。試しに Yahoo! Japan (<http://www.yahoo.co.jp>) で「柴又」をキーワードに検索してみると、次のようなホームページを抽出することができる。（最新情報として 2011 年 11 月 30 日現在の情報を掲載）

- 24) a 葛飾柴又ホームページ（提供：柴又神明会・葛飾区観光協会）：見出しに英語あり
- b ウィキペディア フリー百科事典 「柴又」：特に有意義性なし
- c 同上「柴又駅」：特に有意義性なし
- d 葛飾区柴又観光協会ホームページ：見出しに英語、年中行事・観光名所情報が多い
- e 葛飾観光ポータルサイト：言語対応あり（英・中・韓）、観光情報が多い
- f 柴又帝釈天公式ホームページ：言語対応あり（英）
- g その他（個人サイトなど）

これらのインターネット情報には、すべてに等しく映画『男はつらいよ』の紹介が見られるし、ホームページ同士が相互にリンクを張っていて、どこからでも映画とつながりが持てる状況を呈している。「柴又」という地域社会と『男はつらいよ』という映画とは、切っても切り離せない関係性ができあがっているのである。映画の教材価値としてこうした社会との関係性に着目することには、「学習者の社会参入・参画の契機」や本稿の位置づけにもなっている「教室中心主義からの解放」等の観点から見て大きな意味があると言えるだろう。ホームページの情報で外国人学生にとって有意義なのは、これらのホームページが比較的、多言語対応を準備している点である。また、内容から見て特に秀逸なのは、葛飾観光ポータルサイトからリンクできる「かつまるガイド」や「葛飾観光ガイドマップ」である。「柴又」という地域社会に関わりを持とうとするときに活用の価値が高い情報を多様に提供している。

6.2 映画『男はつらいよ』に関連する諸メディアを通じた社会参画

6.1 では特に「柴又」という地域社会に特化した教材価値を述べたが、『男はつらいよ』に関連す

る窓口の存在は、「柴又」という一つの地域社会だけではない。その他にも様々なメディアが存在する。それらをすべて網羅して紹介することは到底できないが、映画の教材価値という側面から見て、有意義なものをいくつか挙げることにする。まずは、6.1と同様にYahoo! Japan (<http://www.yahoo.co.jp>) の検索機能を用いて「男はつらいよ」というキーワードで検索したインターネット情報の結果を以下に示す。(2011年11月30日現在)

- 25) a 『男はつらいよ』松竹公式サイト
 b ウィキペディア フリー百科事典「男はつらいよ」
 c Hatena のポータルサイト：はてなキーワード「男はつらいよ」
 d 「男はつらいよ」映画／作品情報 Yahoo! Japan 映画
 e 「男はつらいよ」goo 映画
 f 「男はつらいよ」(公式ホームページ) Facebook
 g その他(個人サイトなど)

トップに抽出されたのは、映画『男はつらいよ』を製作している松竹株式会社の公式サイトであった。映画の概要や歴史、製作者の様子など様々な方面から充実した映画の紹介を行っており、映画の視聴にともなって有意義な情報を提供している。中でも40周年プロジェクト(2009年8月27日をもって終了)の報告は、「映画の上映会情報」や「寅さん川柳コンテスト」など、学生たちの社会参画の支援契機につながる有益な情報が満載であった。以下に続くbやcは、『男はつらいよ』に関する一般的な情報を集約したページで、映画の概要を知ることができるし、dやeも映画に特化した説明を知ることができる。また、友だちや同僚、同級生、仲間たちと交流を深めることを目的としているFacebookに『男はつらいよ』が登場したことは、日本人学生や外国人学生にとって、この映画を通しての社会参入や参画を支援できる一つの環境が整ったと言えるだろう。寅さんを話題にして、様々な方面との人的交流やコミュニケーションのきっかけが生まれる土壌が『男はつらいよ』にも存在するのである。

続けて、Yahoo! Japan (<http://www.yahoo.co.jp>) の検索機能を用いて、「寅さん」をキーワードに抽出してみると、これまでの「柴又」や『男はつらいよ』で拾われた情報と一部重なったが、新たに「葛飾観光ポータルサイト」内の「寅さん記念館」のサイトや「渥美清寅さんこもろ会館」のような記念館の情報、「文化放送開局60周年特別企画 みんなの寅さん(山田洋次映画監督50周年プロジェクト)」(本稿3.1より再掲)、その他これまでの検索にかからなかった個人サイトが抽出できた。このようにインターネットを利用した『男はつらいよ』に関連する情報については大変豊富に揃っており、映画を使用した教室での授業だけでなく、教室を離れたところも含めて学習の契機拡大が期待できる。

この他にも『男はつらいよ』に関連する書籍類やDVD作品に関連する情報など様々なメディアを通した『男はつらいよ』情報が確認できる状況であり、映画の学習から拡大する日本社会への社会参入や社会参画を支援でき、学習の幅広い契機を与えることができる。これに関連する研究としては『男はつらいよ』を利用した「日本語マルチメディア教材の開発」について報告している石上・坂谷内・小松(2001)があるが、『男はつらいよ』を対象とした研究の代表的なものであり、映画を利用した教材研究の啓発的研究として評価できるものである。

7. おわりに：教材論から教材価値論への転換

本稿では、映画『男はつらいよ』を取り上げて、日本語教育における映画の教材価値を考察した。映画の持つ諸特徴や受講者の授業カルテの記述などから分析した結果、この映画にはこれまでも一般的に取り上げられてきた日本語が素材となる「言語的な教材価値」、文化や社会が素材となる「内容的（非言語的）な教材価値」、外国人の社会参画を支援できる教材価値」が指摘できた。特に映画を通じて外国人が社会参加しやすくなる契機を生み出す力や映画にまつわる様々なメディアを利用して外国人が社会参画する可能性を指摘できたことは、新たな教材価値論の出発点になると思われる。本稿の理論的な位置づけは、従来の教材論ではなく、「学習者と教材」の関係性、「教師と教材」の関係性、「教材化のプロセス」を統合した「教材価値論」であった。従来の教材論では既成の教材への眼差しが強かったが、今後は素材から教材価値を見出すことや島田徳子・柴原智代（2008）が啓発するような「教材開発」がもっと進められるべきである。教材論から教材価値論への転換が求められていると言えるだろう。課題としては、本授業科目の活動で実施した「教材価値シート（作品別）」の分析が残っている。これは、学習者の映画に対する認知度や好感度、また教材として利用した場合の成果や効果を含めた評価度を分析するための活動タスクシートである。また、本授業科目で取り上げなかった別のシリーズ作品の分析も調査対象にしてデータを収集する必要があるが、これも今後の課題である。

注

- 1) 学部の枠を超えた総合的かつ多様な教育を実現することを目的として2000年12月に設置された早稲田大学のオープン教育センターが展開している授業科目を指す。
- 2) 多文化共生社会については、報告書「地域における多文化共生の推進に向けて」（2006年3月：多文化共生の推進に関する研究会）や報告書『多文化共生社会基本法の提言』（2003年3月：外国人との共生に関する基本法制研究会（山脇啓造代表））などを参照のこと。
- 3) 授業カルテとは、日付、学生の氏名や学籍番号・所属などの情報の他に「本日のテーマ」、「本日の学び・気づき・感想など」、「クラスメートとの話し合いメモ」、「担当者からのコメント」を書いて提出するA4用紙1枚の授業活動シートのこと。毎回の授業で提出させ、すべての授業カルテに授業担当者からコメントを書いて返却する。
- 4) 日本語教育研究センターで開講している副専攻科目は大きく必修の「コア科目」と「選択科目」があり、本授業科目はこのうちの「コア科目」に位置づけられている。
- 5) 2011年度に日本語教育研究センターが提供したオープン教育科目の選択科目に「日本語教育の教材」（担当：吉岡英幸教授）があった。
- 6) 本稿では「教材」と「素材」を区別している。「教材」は、日本語教育用の教科書や副教材等を指し教育用に作成されたもので、「素材」は、教育用に加工された部分を持つ以前のものを指す。従来、生教材（レアリア）とも呼ばれている。
- 7) 共生言語については、岡崎（2003）を参照のこと。
- 8) 石田（1988, 2008改訂新版）では、サイレント法という呼び方はないが、VTRの特性として「音を消して画面だけでも使える（p. 274）」との指摘がある。

参考文献

- 荒川洋平 (2004) 「教材論の射程」『日本語教育教材研究ブックレット』第1号 東京：日本語教育教材研究フォーラム, 31-34.
- 石上普保・坂谷内勝・小松幸廣 (2001) 「『男はつらいよ』を利用した日本語マルチメディア教材の開発」『国際文化フォーラム通信 No.49』, 7.
- 石田敏子 (2008) 「第18章 視聴覚教材の利用」『改訂新版 日本語教授法』, 256-288.
- 大川英明 (2006) 「映画における文化要素と日本語教育」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』16号, 111-127.
- 岡崎俊雄 (2004) 『アルクオンデマンド BOOKS 日本語教育の教材 分析・使用・作成』アルク.
- 岡崎俊雄 (2003) 「共生言語の形成—接触場面固有の言語形成—」『接触場面と日本語教育』宮崎里史, ヘレン・マリオット編 明治書院, 23-44.
- 門倉正美 (2011) 「コミュニケーションを〈見る〉—言語教育におけるビューイングと視読解—」『早稲田日本語教育学』第9号, 115-120.
- 川上郁雄 (1999) 「『日本事情』教育における文化の問題」『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』「21世紀の『日本事情』」編集委員会編 くろしお出版, 16-26.
- 窪田富男 (1989) 「教科書・教材論」『日本語教授法』木村宗雄・窪田富男・阪田雪子・川本 喬編 おうふう, 100-126.
- 窪田守弘 (2007) 「序章 映画で日本文化を学ぶということ」『映画で日本文化を学ぶ人のために』窪田守弘編 世界思想社, 4-9.
- 窪田守弘 (2001) 「映画の醍醐味と教材としての活用法」『国際文化フォーラム通信 No. 49』, 2-3.
- 桑本裕二・宮本律子 (2006a) 「背景知識の教授をめざした「日本事情」への映像使用」『秋田大学教養基礎教育研究年報』, 61-68.
- 桑本裕二・宮本律子 (2006b) 「日本映画から考察する日本文化—秋田大学における「日本事情」の実践から—」『秋田大学教育文化学部教育研究実践紀要』第28号, 177-184.
- 国立国語研究所編 (1995) 『日本語教育指導参考書 21 視聴覚教育の基礎』国立国語研究所 大蔵省印刷局, 6-38, 80-91.
- 佐久間勝彦 (1989) 「視聴覚的方法と視聴覚教材」『講座 日本語と日本語教育 13 日本語教育教授法 (上)』明治書院, 324-349.
- 佐藤慎司・熊谷由理編 (2011) 『社会参加をめざす日本語教育—社会に関わる, つながる, 働きかける—』ひつじ書房.
- 島田徳子・柴原智代 (2008) 『国際交流基金 日本語教授法シリーズ 14 教材開発』ひつじ書房, 2-37.
- 徳永あかね (2009) 「多文化共生社会で期待される母語話者の日本語運用力—研究の動向と今後の課題について」『神田外語大学紀要』第21号, 111-129.
- 中村朱美・園田博文 (2004) 「留学生と日本人学生の混在授業における異文化理解教育—日本文化研修と異文化交流会での試み」佐賀大学留学生センター紀要, 33-48.
- 中山英治 (2009) 「授業間の連携を活用したタイの大学における新しい試み—授業の実践報告と映画『男はつらいよ』の教材価値—」『アジアにおける日本語教育—「外国語としての日本語」修士課程設立一周年セミナー論文集—』, 49-72.

中山英治／日本語教育における映画の一般的な教材価値と社会参画を支援できる教材価値

- 福島青史（2011）. 社会参加のための日本語教育とその課題— EDC・CEFR・日本語能力試験の比較検討から『早稲田日本語教育学』10, 1-19.
- 分藤大翼（2010）「文化研究における映像の活用法—映像人類学の近年の展開について—」『可能性としての文化情報リテラシー』岡田浩樹・定延利之編 ひつじ書房, 29-41.
- 細川英雄（2003）『『個の文化』再考：—日本語教育における言語文化教育の意味と課題—』『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』「21世紀の『日本事情』」編集委員会編 ころしお出版, 36-51.
- 細川英雄（2002）『日本語教育は何をめざすか—言語文化活動の理論と実践』明石書店.
- 松岡洋子・宮本律子（2003）「生活コミュニケーション能力の構成要素—映像教材調査分析からの一考察—」『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学部門』58, 17-22.
- 村松由起子（2004）「日本語初級ビデオ教材を利用した日本人学生・留学生混在型クラスの日本語学習の視点から見た有効性」『雲雀野』第26号 豊橋技術科学大学紀要, 55-63.
- 山本富美子（1997）「聴解指導の視点と技法」『上級日本語教育の方法』藤原雅憲・初山洋介編 凡人社, 91-122.
- 吉岡英幸（1992）「視聴覚教材論」『日本語教材概説 HANDBOOK OF JAPANESE LANGUAGE TEACHING MATERIALS』河原崎幹夫・吉川武時・吉岡英幸共編著 北星堂書店, 17-27.
- 吉村英夫（2005）『完全版『男はつらいよ』の世界』集英社文庫.

映画『男はつらいよ』：本授業科目で取り上げた作品

『男はつらいよ 寅次郎夢枕』	第10作	(1972)
『男はつらいよ 葛飾立志篇』	第16作	(1975)
『男はつらいよ 寅次郎と殿様』	第19作	(1977)
『男はつらいよ 寅次郎頑張れ!』	第20作	(1977)
『男はつらいよ 寅次郎春の夢』	第24作	(1979)
『男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花』	第25作	(1980)
『男はつらいよ 寅次郎かもめ歌』	第26作	(1980)
『男はつらいよ 口笛を吹く寅次郎』	第32作	(1983)
『男はつらいよ 柴又より愛をこめて』	第36作	(1985)
『男はつらいよ 寅次郎サラダ記念日』	第40作	(1988)
『男はつらいよ 寅次郎心の旅路』	第41作	(1989)